

性白血病8例中7例, PHA 刺激リンパ芽球にもソマトスタチン受容体が存在することが明らかとなった。

8. ブドウ糖刺激によるインスリン分泌と陽イオンの役割

櫻田正也 (千大)

ブドウ糖刺激による膵島からのインスリン分泌 (IR) 及び Ca efflux (CaE) を膵島周辺灌流系において検討した。細胞内 pH の低下により K⁺ 及び Ca²⁺ 動態の変化する IR 機序の存在が示唆された。ブドウ糖が生理的濃度で徐々に上昇すると, IR が始まり, この間, CaE は抑制されることから, IR の機序において CaE の抑制が重要な一因子であると考えられた。ブドウ糖濃度上制昇率の差異により, 第1相と第2相の IR に差のあることが示唆された。

9. ソマトメジン C のインスリン様作用に関する研究

—PDE 活性化系による分析—

栗林伸一 (新八柱台病院)

遺伝子工学的手法により合成されたヒト・ソマトメジン C (SMC) を用いて, c-AMP phosphodiesterase (PDE) 活性を測定した。SMC は insulin 同様 lipid formation のみならず, PDE 活性を示した。活性化様式は insulin と同様であったが, 反応の強さは insulin の1/173であった。trypsin (1 mg/ml) で insulin receptor を破壊すると反応が消失することより, この作用は insulin receptor を介するものであることが示唆された。

10. NIDDM におけるインスリン分泌不全の機序について

—モデルラットによる検討—

橋本尚武 (千大)

NIDDM モデルラットの膵ラ氏島でのインスリン分泌は, Glucose で低下していたが Arginine では保たれていた。Glucose による ⁴⁵Ca²⁺ efflux は第一相は保たれていたが第二相は欠如し, ⁴⁵Ca²⁺ uptake は低下していた。モデルラットのラ氏島の直径はコントロールと有意差なく, 酵素抗体法にてインスリンは比較的良く保たれていた。以上より NIDDM モデルラットにおける Glucose によるインスリン分泌不全の一因として Ca handling の異常が示唆された。

12. 当科における悪性リンパ腫に対する治療成績

比留間潔, 五十嵐忠彦, 伊藤国明
(千大)

1978年より1987年まで, CHOP-bleo 変法療法にて治療され, LSG 分類にて再評価可能, かつ追跡調査可能であった非ホジキンリンパ腫 26 例の治療成績を報告した。平均年齢46.2歳, 男性18例, 女性8例, リンパ節原発22例, 臨床病期Ⅱ8%, Ⅲ19%, Ⅳ73%, Follicular large 3例, Diffuse large 8例, Diffuse medium 8例, その他7例。完全寛解率46.0%, 5年生存率29.4%。Diffuse large に対する治療効果は特によく, 5年生存率50%。

14. 骨髄移植後の血液型変化

脇田 久, 小森功夫, 浅井隆善
(千大・輸血部)
佐藤武幸 (同・小児科)

当院で施行された ABO major mismatch 同種骨髄移植4症例 (AML 3例, RAEB 1例) につき移植後の血液型変化を検討した。AML 3症例に生着が確認され, 凝集素価の低下に伴い Donor 型赤血球の出現が認められ, 凝集素価の高い症例では Donor 型赤血球出現の著しい遅延が認められた。また, 末梢血の Donor 型血液型転移酵素 (Transferase) 活性は, 2症例において Donor 型赤血球出現にともないその上昇がみられたが, 他の1症例では変化はみられなかった。

15. 炎症性腸疾患の臨床的検討

渡辺東也, 笠貫順二, 吉田 尚
(千大)

我々は, 潰瘍性大腸炎活動指数 (以下 UCAI) を考案し, 過去10年間に経験した36例の潰瘍性大腸炎の症例につき検討を加えた。サラゾピリン及びステロイドをプレドニン換算で30mg を越える量を必要とした患者群では UCAI が著しく高値で, 初期の段階から, より強力な治療が必要である事が示唆された。

16. 血液疾患と消化管病変

吉川信夫, 岸 幹夫, 渡辺東也
笠貫順二, 吉田 尚 (千大)
今泉照恵 (鴨川市立病院)

最近6年間に当科で上部消化管内視鏡検査を施行した鉄欠乏性貧血をのぞく血液疾患 (白血病15例・悪性リンパ腫9例など) 57症例について検討したが, 粘膜障害が